

開削の成果

— 先進的な農業地帯へ変容（日本デンマーク） —



農業に関する方法成績 1910年



明治用水紹介の愛知県図書館所蔵本

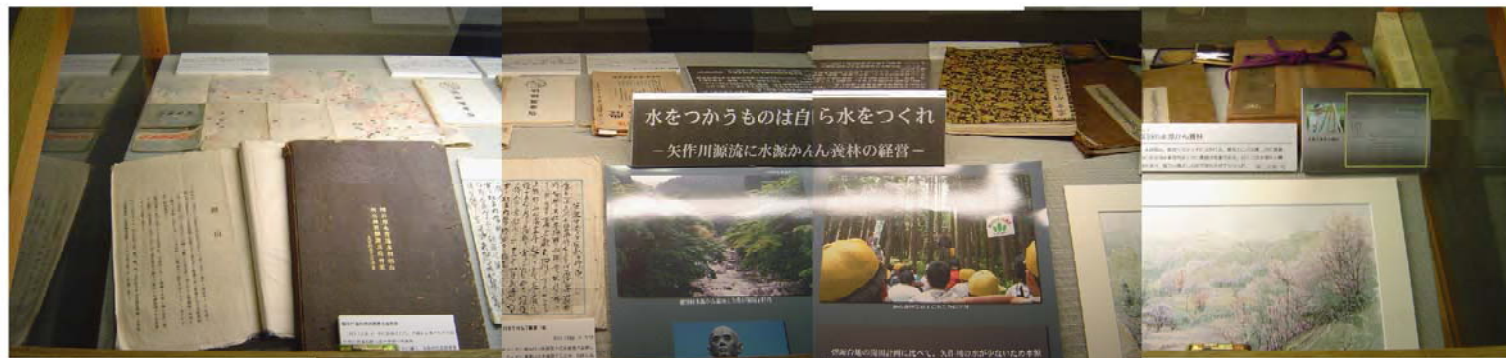
安城市を中心とする碧海台地は、県立安城農林学校（現愛知県立安城農林高等学校）初代校長山崎延吉（やまざきえんきち）はじめ優れた農業指導者と農民の先進的な取組や勤勉さにより、大正時代から昭和初期にかけて、「日本デンマーク」と言われる先進的な農業地帯へ変容した。

秋に明治用水が断水すると、台地は干し上がって畑となり、麦、菜種、れんげが栽培され、耕地の様々な利用が図られた。さらに農業経営として、米作に養鶏、養蚕、蔬菜、果樹を配する五角農業で、労力の分散と経営の安定化を図る多角的農業が導入された。

そして、農作物を共同出荷するため産業組合（農協の前身）をつくり、値崩れを抑え安定的な収入を図った。

水をつかうものは自ら水をつくれ

— 矢作川源流に水源かん養林の経営 —



開墾事業に付官有林払下願書(稿)
1884年



根羽村造林地実測簿及造林案
1915年



水の神様 岡田菊次郎

碧海台地の開田計画に比べて、矢作川の水が少ないため水源地に強い関心があった。国有林が民間に払い下げられるという話を聞き、明治用水普通水利組合（現明治用水土地改良区の前身）は矢作川上流の森林が乱伐されるのを恐れ、明治用水へ払い下げられるよう運動を起こした。この100年前の出来事をきっかけに、水源かん養に自ら乗り出し、現在は約525haのかん養林を所有管理している。

この効果として、水に関する学習や流域住民の交流活動につながり、かん養林の重要性をよびかけるため平成19年には「水源かん養林基金」を創設した。